島根の記憶 ①

袖師ヶ浦の地蔵

手元に膨大な数の写真のコピーがある。旧制松江高（現島根大）の教壇に立ったドイツ人哲学者フリッツ・カルシュが、大正末期から昭和初期にかけて撮影した松江市や周辺の風景、風俗だ。小泉八雲に影響され、八雲が松江を去った三十四年後の一九二五年に来日し、三九年まで十四年間、松江で暮らした。カルシュを研究する若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授の手で発見された写真と資料をもとに、カルシュの足跡をたどり、変わり、変わらぬ何かを見つめてみたい。

1927年ごろ撮影された袖師ヶ浦の地蔵（若松教授提供）

現在の地蔵2体。移設前より嫁ヶ島が近い

亡き子しのばせる湖畔

カルシュ、大正―昭和の写真1500枚残す

膨大な島根の風景を残したフリッツ・カルシュ

妻エンメラと来日したカルシュは、早世した長男のほか、松江で長女メヒテルト（78）、二女フリーデルン（67）をもうけた。滞在中は非常に活動的で、ドイツ製カメラを持ち歩いて撮影、ドイツとアメリカに住む2人の娘の家にアルバムが現存。写真は1500枚以上とみられ、若松教授が2001年から2002年にかけ娘たちから一部を入手。ほとんどに通し番号と撮影日時、場所などが、郷のあるドイツ語で添えられている。画質が褪ばむなどの劣化は驚くほど少なく、保存状態は良好という。

松江郷土館の新庄正典学芸員は「この時代、一人がこれほど多くの写真を撮っているのは大変珍しい。山陰の原風景を今に伝えるものばかりで、後世に残していきたい」としている。

カルシュを研究する若松教授

宍道湖畔に佇む二体の地蔵は、穏やかで慈愛深い面差しをたたえていた。ともに右手に鋼杖、左手に宝珠を携え、西方浄土を向く。高さ二・五メートル、来待石特有の深みを帯びた一体が袖師地蔵、一回り小さい御影石製が石灰地蔵。故郷を離れ、相対した〈異人〉の目には、どう映ったろうか。

地蔵を撮影したのは二七年（昭和二年）ごろ。写真に撮き見らず、精密なパステル画も描いている。浜乃木干拓が始まる三十年近く前で、二体は自然石の転がる砂浜の一角に立ち、周辺は水浴場だった。

「子供たちの絶好の遊び場で、真っ裸でよく泳いだ。嫁ヶ島に通じる水中参道の『弁天道』も、ひざ辺りまでの深さで、島まで年中行けましたよ」。毎年八月に供養を欠かさない、近くの円成寺の若槻大峰住職（75）は振り返る。

「嫁ヶ島残照」は、今も宍道湖を代表するスポットだが、当時はより風情があったという。しかし間もなく、若き哲学者に悲劇が訪れた。長男が生後七日で死亡、その遺骨は母国に持ち帰った。我が子を思い、子供を護る地蔵に見入ったとしても不思議ではない。

二体は七一年、市道拡張に伴い、西に約百二十メートル移動して現在の場所に。袖師地蔵は江戸時代初期に建てられたが、九三年に造り替えられ三代目となる。移設に際し、父敬郎さんが市や旧建設省に掛け合ったという逸話が残る。

「お役所も、なくしてしまうと、バチが当たると思ったんでしょうか……。昔から、子をとてもしん親御さんが、お参りと見えます」

遊楽学ガイド

映画

◆アジアンシアター「ホテルハイビスカス」　17日午後2時、7時、木次町のチェリヴァホール。前売り1000円、当日1200円。

演劇

◆ソング&ダンス　パート2　20日午後7時、出雲市民会館。C席3500円（残席わずか）、立ち見3000円。

ギャラリー

◆第83回夏の山陰展　17、18日、松江市殿町、タウンプラザしまね。

◆夏かざり小品盆栽展　17、18日、松江市東朝日町、中電ふれあいホール。

◆第5回石見の作家展　水津保美　17日―8月6日、三隅町の石正美術館。無料。10日以外の月曜、20日休館。

◆第7回特別展「しまねレッドデータの生きものたち～水辺編～」　17日―8月23日、平田市の県立自然館ゴビウス。大人500円、高・中・小生200円。26日、8月1日休館。

◆浜田生まれの日本画家　橋本明治展　17日―9月5日、浜田市世界一。ほか美術館

講演する龔老さん（県立青少年の家サンレイクで）

「個性」テーマに龔老孟司さん講演

ゴビウス開館3周年で

著書「バカの壁」などで知られる解剖学者の龔老孟司さんが、平田市小境町の県立青少年の家サンレイクで、県立美遊湖自然館ゴビウス開館三周年の記念講演をし、市内外の約二百六十人が聞き入った。

子供のころ、昆虫採集や魚を採るのが好きだった龔老さんが、二〇〇二年十月に来県した際、同館を訪れたのが縁で講演が実現。

龔老さんはユーモアを交えながら、「現代は個性が尊重され、人には変わらない個性があると思われがちだが、物事を知ることで人は変わり続ける。教育の根本は人を変えること」と話し、島根の印象について「自然が豊かで、昔の日本が残っている」と述べた。

島根の記憶 ②

カルシュ、その人（1）

山陰の風景と風俗を、千五百枚以上の写真に残したドイツ人哲学者フリッツ・カルシュ。島根との縁を、研究者の若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授(57)に、二回にわたって紹介してもらう。

まず、カルシュがどんな人で、何をしたかを傍観してみたい。

一八九三年、ドイツ東部のブラゼヴィッツで父ヘルマン、母ルイーズの間に生まれた。ラフカディオ・ハーンの書の影響で、一九二五年(大正十四年)、旧制松江高（現、島根大）に赴任。十四年間、教べんを執り、多くの人材を育てた優れた教育者であると同時に、日本の哲学や宗教の研究にも力を注ぎ、外交官として終戦まで働いた。七一年にカッセルで死亡した。

薫陶を受けた生徒の中には、「長崎の鐘」で知られる永井隆博士をはじめ、多くの著名人を見いだせる。直接、指導と影響を受けた者には、学界、政界、法曹界の重鎮、さらに実業界や外交官などの要職にあった者、スポーツ界の功労者が挙げられる。

彼の残した足跡と人々との交流には特筆すべきものがある。しかし、これまで全くと言っていいほど、その業績が、松江の人々の間でも知られていない。

「袖すり合うも多生の縁」と言うが、縁もゆかりもなかったカルシュと私を結びつけたのは、全くの偶然だった。そもそもの発端は、シュツットガルトのホテルで、カルシュの娘さんに出会ったことにあった。しかし、今にして思えば、それに至る経緯は、とても偶然と思えない出来事の集積によるものだった。

残念ながら、カルシュは日本では戦中戦後の渦中に紛れた、人に知られぬ哲学者である。わずかな手がかりから彼の足跡を追う中で、次第に偉大さを知ることになった。何とかして、その功績を公平な目で見てあげたい。そんな思いから筆をとったこともあった。

カルシュが生まれて百十年経過した。彼は、人の認識の発展過程を考究する人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介した人物でもある。日本を第二の故郷として愛したカルシュを顕彰することは、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。

（東京医科歯科大大学院教授　若松　秀俊）

1939年ごろのフリッツ・カルシュ（右端）一家。左から妻エンメラ、長女メヒテルト、二女フリーデルン（若松教授提供）

各界の重鎮ら育てる

島根の記憶 ③

カルシュ、その人（2）

松江で心の平安発見

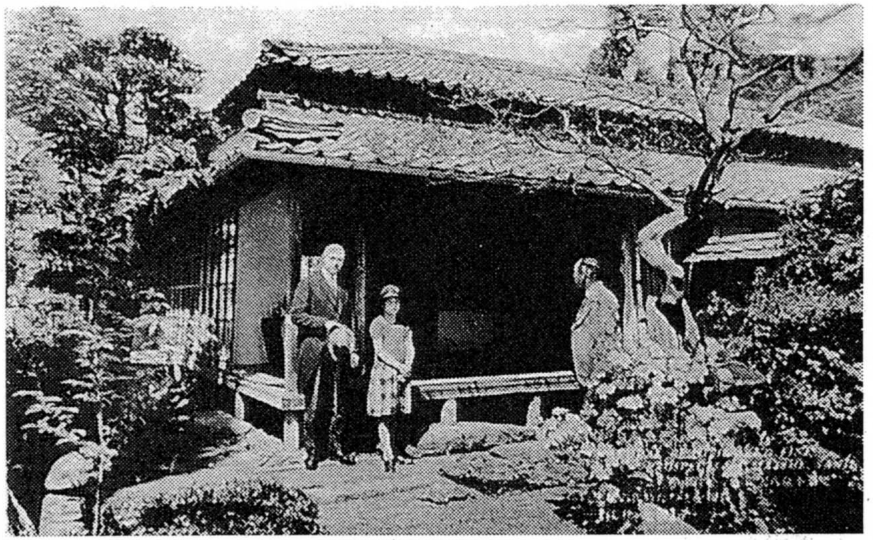
カルシュが最初に日本と出合ったのは、一九一一年のドレスデンでの国際博覧会だった。関東大震災の前、日本の高等学校への誘いがあったが、募集は見送られた。その後、進言もあって、旧制松江高のドイツ語講師の道を選んだ。

ひと月半に及ぶ航海の末、神戸港に着いたカルシュ夫妻は見知らぬ国で不安と期待で一杯だった。それでも何とか二五年九月二十八日、あこがれの松江に着き、奥谷町の官舎に人力車で早速向かい、入居した。

官舎は、外国人講師のために建てられた小さな洋館で、新任夫妻の居と定められていた。妻エンメラは、異国で頼り合う愛を確かめるように夫の傍らに身を寄せた。

これが日本での第一歩だった。その後、もろもろの人々との不思議な縁が待っていた。一か月ほどたって周りが少しずつ分かり、落ち着いてくると、少しずつ動き出した。

小泉八雲旧居をよく訪れたという（若松教授提供）



日曜日は散歩に出かける。官舎近くは静かなところだ。不思議なくらい不安が消える。どうやら心の静けさを感じさせる何かがあるようだ。神々の住む出雲地方のことは、ラフカディオ・ハーンの書からよく知っていたつもりだった。

「自分の心は神々と生徒たちとありたいものだ」

カルシュは来日以来、日本の社会や自然の中に、限りない落ち着きを感じた。一見、混然としたたたずまいに不思議な秩序があり、自然の中にヨーロッパにない調和の美を見いだした。心が安らぐ日々。積極的に地元の人々と交流し、かつて経験したことのない雰囲気を吸収しようとした。

ハーンの住んでいた家を何度も一人で訪ねたという。ハーンの影響を受けて来日したカルシュにとって、日本との最初の接点を与えてくれたという意味で感慨深かっただろう。長女メヒテルトも何度も父と訪ねたという。今も変わらぬ雰囲気とたたずまい。メヒテルトの、現在に連なる感性を培った日本の心と息づかいを感じる所である。

（東京医科歯科大大学院教授　若松　秀俊）

島根の記憶 ④

島根町加賀

寄港地でにぎわった〝楼〟

石塀横の階段を上ると、空き地が広がり、夏草が覆っている。「ゴミを捨てないで下さい」との立て看板。ここに、かつて大いににぎわい、小泉八雲も旅装を解いた総二階の〝楼〟があったとはとても思えない。

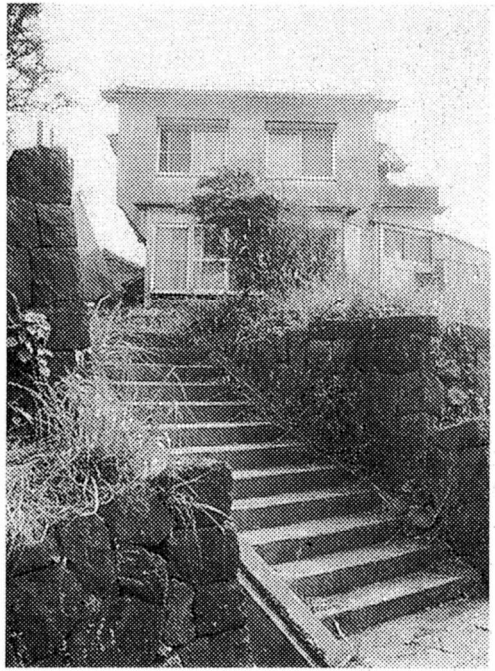
島根町加賀。江戸時代から明治にかけて北前船などの寄港地として栄え、船宿や風呂屋などが数十軒あった。写真(左)は、船頭らが酒盛りし、女たちの歌や三味線で英気を養った「付け船宿」で、「山ン空」と呼ばれた高台にあった。八雲は明治中ごろ、加賀の潜戸見物の際に投宿し、様子を書いている。

「戸口も障子も窓も、およそ宿屋の開いているところはみな、私を見に集まった人々で真っ黒にふさがってしまった。皆黙ってにこにこして見ている……」

町誌によると、この約十年後、二階建てに新築、離れ座敷も建て増し、「吾妻楼」と金で書いた看板を出した。昭和の時代、おかみは〝キワさん〟と言った。「宿の女の人たちが二階から顔をのぞかせ、幼いころ、よく遊んでもらった。キワさんは安来節や博多節が抜群にうまくてねえ」。元タンカー船員で、潜戸のガイドも務める遊覧船長、山田治さん(77)は言う。

近くに住む田中美穂子さん(61)も覚えている。「キワさんは、歌でも三味線でもきちんと修業した粋な人でした。そのキワさんに聞いた話では、八雲さんは泊まる度に半紙に何かを書き残し、それが押し入れの隅に束で置いてあった。でも、焼いてしまったんですって。残念ですけどねえ……」

「ラフカディオ・ハーンが滞在した宿」。撮影者のフリッツ・カルシュが、アルバムにそう書き添えた建物は、港町がにぎわいを失っていってもキワさんが一人守り続け、十数年前に取り壊された。目を閉じるとどこからか、三味線の音が聞こえてくる気がした。



◀(左)小泉八雲も滞在したという島根町加賀の宿(若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供)(右)建物は取り壊されたが、石塀と階段が往時をしのばせる

島根の記憶 ⑤

松江の大火

見渡す限り焼け野原

炎は強い西風にあおられ、一気に広まった。一九三一年五月十六日午後、松江市の松江大橋北詰にあった旅館から出火し、約十三㌶、六百戸以上を焼き尽くした。一帯はそっくり区画整理され、現在の東本町となった。

「宍道湖面が揺らぐほどの強風でねえ。飛び火に次ぐ飛び火で、見渡す限り焼け野原になりましたよ」

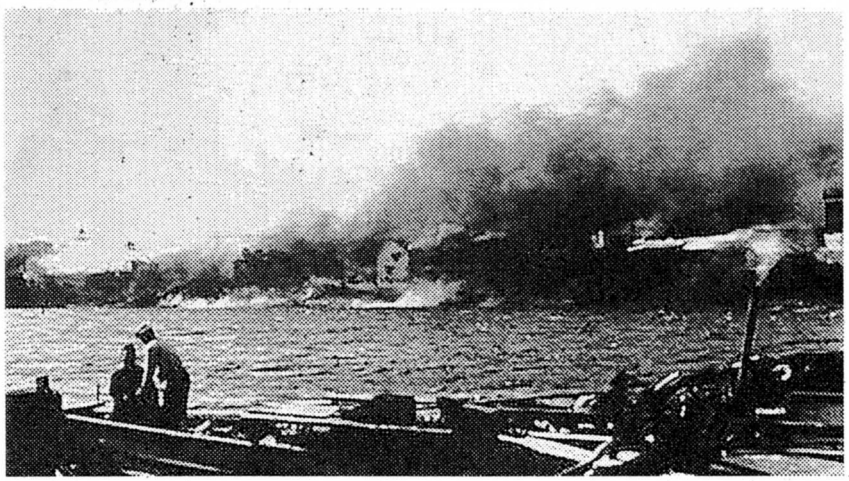
当時、旧鍛冶町（東本町四）に新居を構えたばかりで、地区の青年団長をしていた吉原延市さん(95)は、火元方面に向かって走った。既に至る所に火が回り、手の付けようがなかった。焼け出された人たちは川沿いに集まっていた。新居と所有する十数戸の借家は残らず焼けた。

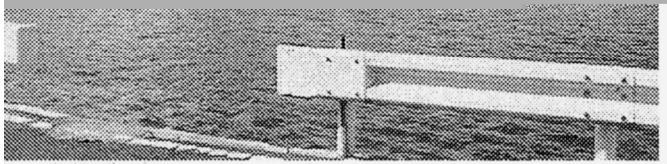
城下町松江は道幅が狭く、江戸時代初めからそれまでに十三回の大火に見舞われた。この火災でも、「武者隠し」と呼ばれるジグザグの道路の先が見えなくなるほど、煙火が立ち込めたにもかかわらず、幸いなことに死者が出なかった。

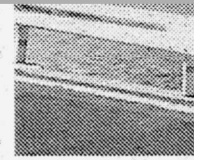
大橋川をはさんで、向かいからとらえた写真は、黒煙の下の混乱をうかがわせる。フリッツ・カルシュの遺物であるこの一枚と全く同じ絵柄の写真を、驚いたことに小竹原清さん(82)が持っていた。

「お年寄りの思い出話に、火事のことがよく出るんですよ。『着の身着のまま逃げた』とか、『延焼を防ぐためといって、兵隊に家を取り壊された』とかねえ。それで私も調べ始めた。写真は二十七年前、焼け出された魚屋さんからいただきましたが、おそらく誰かからもらわれたんだと思います」

吉原さん方の仏間には、火事の際、「誰かが持ち出して京橋川に浸してくれた」という杉の戸棚が残る。区画整理ですっきりした街の一角で、〝生き証人〟として現役を貫いている。







◀㊤1931年の大火。黒煙が西風にたなびいている（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）
㊦大橋川をはさんで、東本町方面を望む現在の風景

島根の記憶 ⑥

大橋川の四つ手網漁

絶えた水辺の風物詩

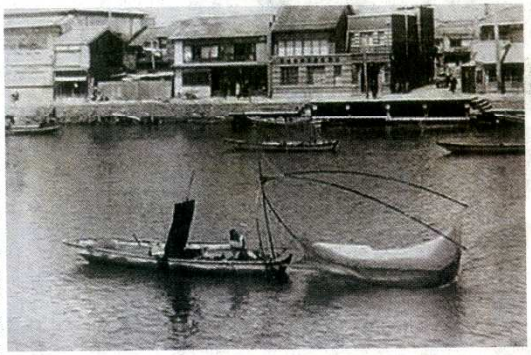
畳んだ四つ手網を持つ佐々木さん
（県立宍道湖自然館ゴビウスで）

「これですよ」。平田市園町の県立宍道湖自然館ゴビウスで飼育展示係を務める佐々木興さん(36)が、大切にしまっている〈幻の漁網〉を見せてくれた。網目は縦横一㌢弱、広げると約四・五㍍四方になる。大橋川や宍道湖で一九六〇年代ごろまで使われていた四つ手網だ。

十字に組んだ竹の先に四隅を結び、持ち上げて船尾に固定。魚やエビの通り道に船を止め、大きなざるのように水面に浸けてすくい獲る。同館が一昨年末に特別展「宍道湖・中海の漁具、漁法」を開いた際「もう使わないが、昔、こんな網もあった」と松江市東本町三の飯塚信喜さん(73)が寄贈した。

「これはシラウオ漁ですね。春先、中海から宍道湖へ、下げ潮を上がって来るところを狙う。帆のようなものは風よけですかな？　岸辺には定置網らしきものも見えますねえ」

写真の光景を飯塚さんが解説してくれた。父勝行さんは、大正時代から自転車店を営む一方、客足の減る冬から早春にかけ、旬のシラウオを四つ手網で取った。



四つ手網を使った大橋川での漁（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

数分おきに網を引き揚げ、中央にたまった魚をすくう。秋には、同じ宍道湖七珍の一つ、モロゲエビを狙った。夜、船尾に下げた松明が川面に映え、格別の風情を醸したという。しかし、漁獲が減ったこともあり、五〇年過ぎにやめた。

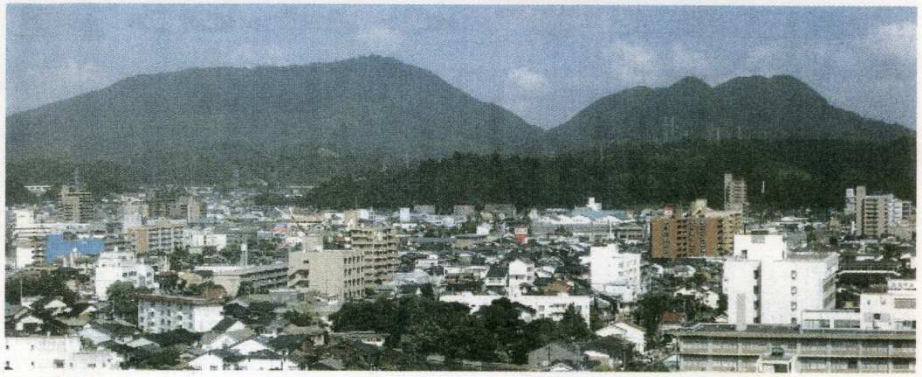
「漁法が原始的ですわねえ、定置網のように一網打尽にはいかない。それに、網を引き揚げる回数が一度の漁で何百回にもなる重労働。本業は別に持っている人が多かったと思う。昭和初期から終戦直後までが全盛期でしょうねえ」。飯塚さんはそう振り返る。

現在、漁は冬場が中心。宍道湖観光遊覧船が行き交う

松江大橋　四つ手の網に
白魚いとしやすくはれる　白魚いとしや四つ手の網に
わたしゃあなたにすくはれる

詩人の生田春月もそう詠った水辺の風物詩が、宍道湖周辺で絶えて久しい。

横たわった少女を思わせる「メッチェン山」（松江城天守閣から）



旧制高生 あこがれ込め

島根の記憶 ⑦

メッチェン山

標高約六十㍍に相当する松江城天守閣から、松江市街地東部を望むと、頭を南にし、あおむけに寝た人の形に見える連山がある。顔の部分が和久羅山（標高約二百八十㍍）、首から下が嵩山（同約三百三十㍍）で、山頂付近が豊かなバストに。ドイツ語で「女の子」を示す〝メッチェン〟山とは、よく言ったものだ。

仏様が寝ているようでもあり、昔から市民に「寝仏山」と親しまれた。一帯は県立自然公園に指定され、嵩山頂上からのパノラマは絶景。小泉八雲も登ったこの山を、こんなハイカラな名で呼んだのは、ふもとの旧制松江高（現・島根大）の学生たちだった。

「男子校でしたからねえ、あこがれにも似た思いがありました。『いつかあのような麗しい人と……』とね。思い入れが強かったから、今も絵に描くんですよ」と一九四五年入学の島根大名誉教授、西上一義さん(78)（松江市奥谷町）は笑う。

「当時、松江高の東側には田んぼしかなく、真正面に横たわった少女のような嵩山などが見えました。ドイツ語が必修でしてね、どの学生も会話の中で割と普通に使ってた。例えば、『エッセン（食事）』とかね。一般市民と違い、学生には身近だったんですね」

三九年入学の同、竹原敏夫さん(81)（同）は振り返る。同校でドイツ語を教え、この写真を撮影したフリッツ・カルシュが、日本を去ったのは同じ年だった。

鳥取・境港方面の漁師や釣り人からも、中海をはさんで「キューピー山」との愛称で呼ばれる連山。旧制松江高同窓会が九〇年に発行した校史「嵩のふもとに」には、出雲市出身で、同校で図工を教えた草光信成画伯の絵〝メッチェン山〟が冒頭の一角を飾っている。

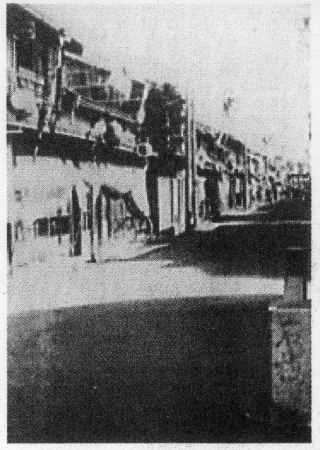
現在と比べ、人家も少なくすっきりしたふもと
（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

島根の記憶 ⑧

松江・石橋町

欄干に街道の面影

写真右下の親柱に目を凝らすと、「石橋」と読める。親柱からは欄干が延び、どうやら橋の名残のようだ。これが、かつて職人町として栄えた松江市石橋町の命名の由来らしい。



「石橋」と読める親柱の立つ街道（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

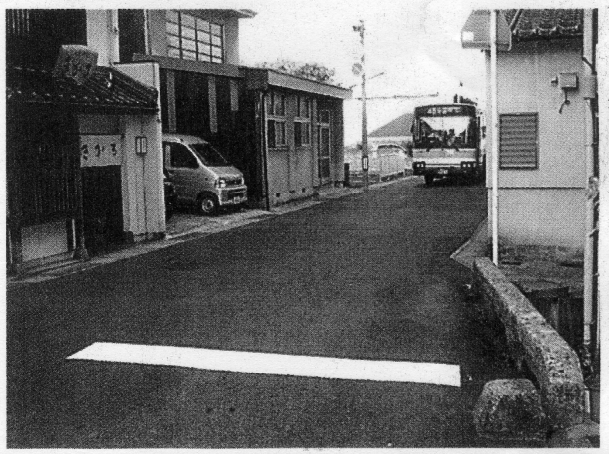
道路沿いにずらりと店の軒先が並ぶ。松江城をすぐ南に臨み、東西に走るこの街道は、城下町から美保関方面に向かう〈メーンストリート〉でもあった。

「質屋に大工、床屋、造り酒屋、お茶屋、げた屋、しょうゆ屋、左官屋、おけ屋、灰屋……。昔はにぎやかでしたがねえ、すっかり様変わりしてしまった」

往来を北に入った場所に住む城北地区町内会連合会長、綿貫勉さん(84)が、軒を連ねていた店の数々をそらんじた。

自宅は一九三一年（昭和六年）まで製糸工場を営んでいた。江戸時代に掘った井戸が近くにあり、タンク代わりに重ねた酒だるから、竹を四十―五十㍍つないで工場に送水し、まゆを煮た。ポンプアップして今も飲み水に使っている。「この辺りにはいい水脈が走ってますから、造り酒屋やしょうゆ屋さんなどがずいぶん栄えた」

街道のにぎわいが遠のくにつれ、下町は閑静な住宅街へ、石橋の姿も変わっていった。地元の人たちの話では、元々、奥谷川に石でふたをした橋で、南北にひざの高さほどの欄干と親柱があったが、道路整備と同川の暗きょ化で南側の欄干と親柱の土台を残すのみに。柱の行方は知れない。



片側に残る低い欄干と土台が面影を伝える

近くの舟越徳男さん(74)は「川はもっと広く、深くて、子供のころはフナが泳いでいた。その昔は、船が米を運んでいたそうです」と振り返る。

石橋のあった場所から路地を入った先にも、井戸と地蔵のほこらがある。住人らが大切にまつり、水脈の恵みも枯れないでいる。

島根の記憶 ⑨

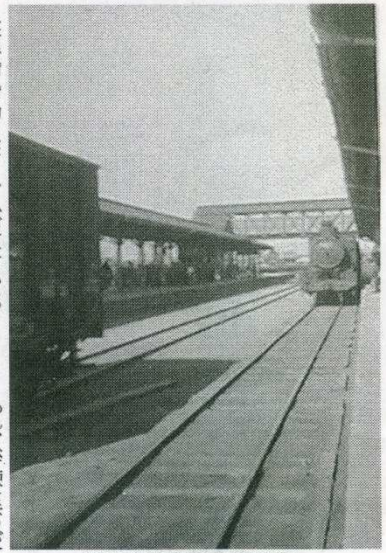
松江駅

開業で近代化幕開け

JR松江駅改札口で待ち合わせた山崎弘さん(70)が、駅構内の一室に案内してくれた。日本鉄道OB会松江支部のメンバーらが憩いの場にしている部屋。先輩の吾郷進さん(79)と山崎さんは写真の蒸気機関車に見入り、〝鉄道員〟の会話が始まった。

「正面の姿からすると『8620型式』ですか？　昭和時代初期が全盛で、旅客列車をよく引っぱった『蒸気でしたがねえ』「いや『C51』かも知れんね」……。

旧国鉄松江駅は一九〇八年(明治四十一年)十一月、米子―松江間の開通に伴い開業。写真は、ドイツ人哲学者フリッツ・カルシュが二七年(昭和二年)に撮影した。駅前に住み、駅構内を遊び場として育った吾郷さんは四二年から三十年間、駅の荷物係として働いた。



1927年の撮影とされる松江駅。蒸気機関車が止まっている

受付で荷札を切り、ホームから専用車両に積み込む。荷を傷付けず、行き先を間違えないよう丁寧で確実な仕事を心がけたという。

「SLだと特に、ほこりと汗まみれでねえ。汚れが目立たないよう、最初から黒いカッターシャツを制服の下に着るんですよ」。戦中は、地元の親から「遠方の子供らに」と託された統制品の米などを、こっそり本などにしのばせた。「駅の吾郷さん」と慕われ、松江駅を去りがたかった。

吾郷さんはいったん、旧米子鉄道管理局(現JR西日本米子支社)に移った後、七五年に松江駅に戻り、八〇年、助役で退任した。その二年後、旅客助役として山崎さんが同駅に赴任。小荷物助役を兼ねていたが、世の中はすっかり車社会化し、鉄道での運搬は既に下火となっていた。

JR移行と同時に退職した山崎さんは、旧国鉄の資料や島根、鳥取両県の市町誌などを十数年かけて調べ、「山陰鉄道物語」を二年前に出版した。松江駅については「その開業によって、島根の産業革命と近代化が幕を開けたと言っていいでしょう」と振り返っている。

かつての写真は、若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授の提供

現在のJR松江駅。1978年に高架化された

島根の記憶 ⑩

松江・三角屋根の外国人官舎

小さな交流にもお国柄

昭和初期、旧制松江高（現島根大）でドイツ語を教えたフリッツ・カルシュの長女メヒテルトさん(76)（米在住）が、松江市奥谷町に吉田繁野さん(74)を訪ねたのは一九九〇年のことだ。「懐かしい松江の人たちに会いたい」と二十一年ぶりに来日し、同町に残る生家や幼なじみの家を巡った。

吉田さんは留守をしていたが、帰宅後、「外国人の女性が訪ねて来た」と家族から聞き、翌日、JR松江駅に見送りへ。「『覚えていてくれた』と感激しましてねえ……。小さいころ、ままごとなどをして遊んだんですよ」と振り返る。

三角屋根を持つ洋館風のその家で、メヒテルトさんは二八年（昭和三）に生まれた。外国人講師のための官舎として二四年（大正十三）完成し、一家は日本を去る三九年まで住んだ。

すぐ近所だった東史さん(73)（宮崎県都城市）が一番の仲良しだった。「日本人形を抱えて遊びに行くんです。メヒテルトさんの家には、青い目の珍しい人形がたくさんあって、並べてお人形さんごっこ。彼女は日本語ができたから、十分会話できました」と思い出を語ってくれた。

小学校に入るまでのつき合いで、東さんも二十歳代で松江を離れた。今もクリスマスカードのやり取りを続けているが、印象的なのは、幼心にも感じたそのへドイツ人気質〉という。

「ままごとで泥をこねて団子を作るのは、もっぱら私。彼女もしたくてウズウズしてるんですが、『洋服が汚れる』とさせてもらえなかった。お父さんはニコニコした方でしたが、お母さんが良いことと悪いことはしっかり区別して、厳しくしつけてたんですね」

宅地化が進み、かつて三人が追いかけたメダカやホタルはめっきり減った。今も島根大独身教職員用宿舎として残る生家の古ぼけた姿が、一帯の歴史ある閑静な雰囲気をとどめている。

着物姿の女の子たち（後列右がメヒテルトさん、前列右が東史さん。1937年ごろの撮影）＝若松秀俊・東京医科歯科大学院教授提供

松江市奥谷町に今も残るメヒテルトさんの生家

島根の記憶 ⑪

松江大橋 その1

「8代目」夢から覚め

〝水の都〟松江市には、六百七十本余りの橋（長さ二㍍以上）がある。中でも橋南、橋北両地区を結ぶ松江大橋の歴史は古い。初代は江戸時代初期にさかのぼり、現在の橋（長さ百三十一㍍、幅十二㍍）は一九三七年（昭和十二年）に完成した十七代目。既に半世紀以上経ているが、二十三年前、〈幻〉に終わった十八代目の構想があった。

松江市街地二万戸以上が浸水した七二年の「47水害」を教訓に、旧建設省と県は七九年、斐伊川・神戸川の治水計画を発表。そのうち斐伊川水系下流の大橋川では、堤防を造り、松江大橋付近の川幅を百四十㍍に拡幅するなどの改修計画が持ち上がった。

川を広げるとなると、橋を架け替えなければならない。計画では、北に四㍍、南に五㍍それぞれ延ばすことなどが必要だった。「まず市民の声を聞こう」と八〇年十月、当時の中村芳二郎市長を代表とする「松江大橋歴史研究会」が設置され、同会は翌年三月、「現状の姿のまま架け替える」とする結論を出した。

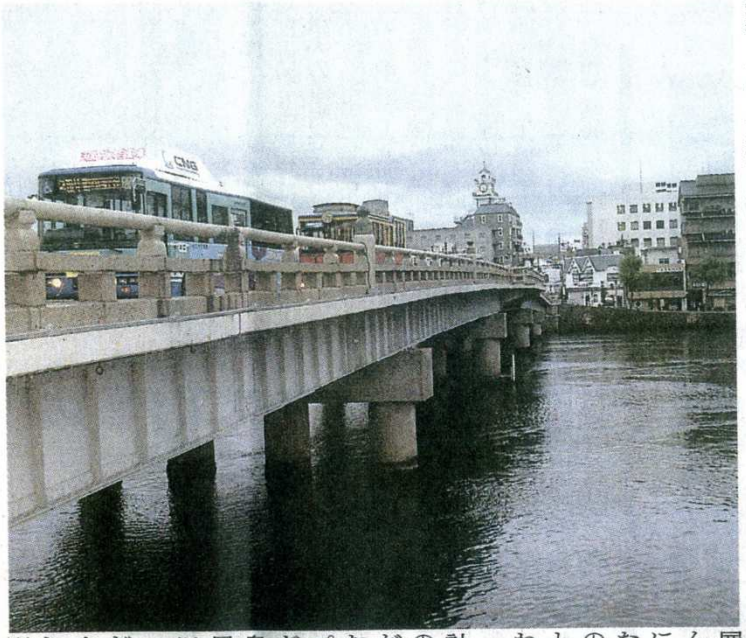
委員は郷土史家ら九人。市文化財保護審議会委員として加わった島田成矩・松江高専名誉教授(73)（日本文化史）は、振り返る。

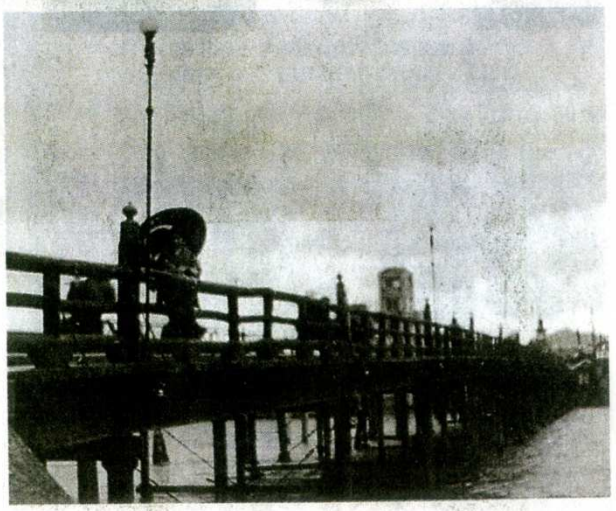
「岡山産御影石の欄干に青銅の擬宝珠、中央に張り出す展望所、春日灯ろう……。こんなしゃれた橋は東京、大阪にもそうはない。架け替えるなら、材料を取り寄せ、松江の名物としてしっかり残そうということになったんですね」

旧建設省はこれを基に、設計に入る予定だったが、直後の八二年、「中海の水位が上がる」と鳥取県側から〈待った〉がかかり、計画はストップ。そして二〇〇一年、上流のダム整備などを背景に、鳥取、島根両県知事が改めて調査測量の実施に合意、十九年ぶりに改修事業は動き出した。

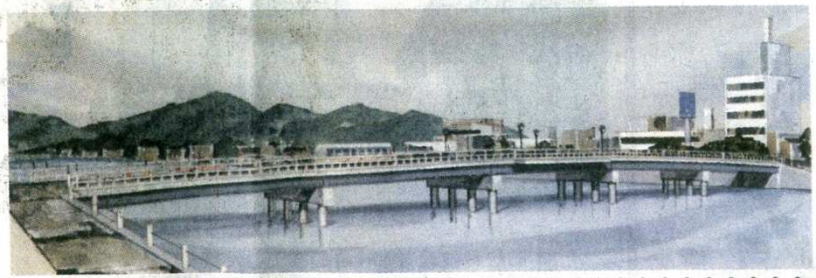
「ただ丈夫に生まれ変わるだけでは意味がない。装飾を含めた全体に気を配らないとね」。島田さんは、今もそう願っている。

バスや車が行き交う現在の松江大橋は17代目





先代（16代目）の松江大橋＝1928年ごろ撮影。
若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供



1981年に発表された18代目の完成予想図

新聞　（第三種郵便物認可）

島根の記憶

松江大橋　その2　⑫

仮橋げた音 陽気なリズム

青年が指さす先は、宍道湖に沈む夕日だろうか。学生帽に、太ひもを結わえた羽織、はかま姿の旧制松江高（現島根大）の学生二人が木橋でたたずむ。昭和初期、同校でドイツ語を教えたフリッツ・カルシュが残したこの写真は、当時架け替えが進む松江大橋の仮橋のようだ。

学生たちは、「ぼくり」と呼ばれる厚歯の高げたを履き、木橋を歩くと力ラカラ鳴った。その約四十五年前、来日間もない小泉八雲に「どうしても忘れられぬ」と言わしめた〝松江の音〟だった。

一八九〇年、松江に到着し、大橋川北詰の旅館に投宿した八雲が見たのは、建設中の第十五代松江大橋と、横でうぐいの字に曲がった仮橋だった。十五代は初の洋式橋として翌春完成したが、近代的な鉄けたや白ペンキ塗りが不評を招いた。

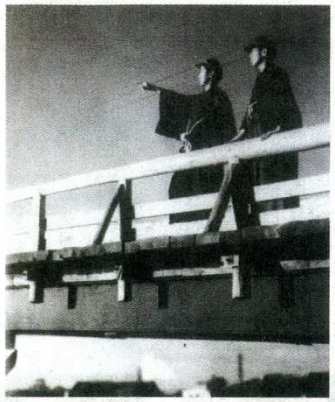
一方、仮橋は「あまたの橋脚に支えられた、無毒のムカデのようではるかに美しい」と愛で、その上で鳴るげたの音をこう評した。

「速くて陽気で調子よく、まるで大舞踏会の足音だ」

この音を確かめる試みが今夏、ひ孫の県立島根女子短大助教授、小泉凡さん(43)の呼びかけで実現した。市内の小中学生十四人が、十年前に木橋として復元された松江城東側の堀川にかかる北惣門橋をげた履きで歩いたり走ったりし、「歩くと力ランコロン、走ると力タッカタッと心が和む、透き通った音がする」「ヘルン(八雲)さんの気持ちが分かったなあと感想を寄せた。凡さんは「視覚だけじゃなく、五感を磨いてほしくて」。

江戸時代初めから約三百年間、橋北、橋南地区を一本で結んだ松江大橋。松江市大橋川・大規模プロジェクト対策課長の渡部修さん(56)は言う。

「対岸を『あっち町』、自分たちの住む方は『こっち町』と、ともすれば隣町より遠い感覚の川の北と南を、にぎやかなげたの音がつないできたんですね」



木橋にたたずむ羽織はかま姿の学生（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

宍道湖に沈む夕日に映える松江大橋

（第三種郵便物認可）　2004年（平成16年）11月4日（木曜日）

島根の記憶 ⑬

多賀神社と河畔

幸せ願う素朴な世界

神等去出さん――。神在月、全国から出雲に参集した八百万の神々が、それぞれの国におたちになる際の祭事をいう。松江市朝酌町で五本の川が合流する地点のすぐ沿岸の森にある多賀神社でも、今月二十五日夜から翌朝にかけて行われる。

神々は鹿島町の佐太神社からここに集い、直会をして帰っていく。本来の立ち寄り先は境内北側の魚見塚古墳で、高台から大橋川を見下ろし、恵比須神の漁の様子をご覧になるのだとも。この邪魔をしないよう、多賀神社の参道二か所にしめ縄を張って人の出入りを封じ、翌朝、縄を解く。

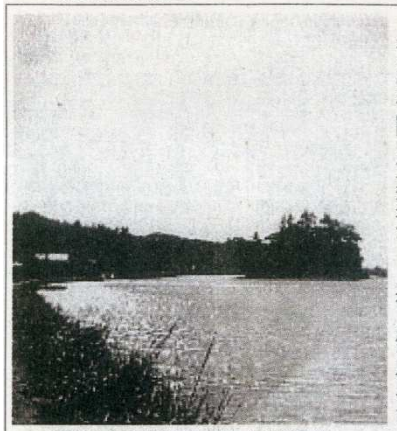
「夜、用を足していると神さまに尻をなでられるから、『夜は便所に行ったらだめ』というのが子供たちの常識だった。失礼に当たるということだったんでしょうねえ」。神社に程近い同市東津田町の三島昌さん(81)が振り返る。

三島さんは子供のころ、神社周辺を遊び場にしていた。大橋川沿いを撮影したドイツ人哲学者フリッツ・カルシュの写真に関心を持つ若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授を約二年前、長男の昌彦さん(49)と一緒に案内したことがある。

めいの知人を通しての出会いだったが、親子とも、松江の人でもほとんど知らないカルシュを研究し、「写真の現場を自分の目で確かめたい」という教授の熱意に打たれ、マイカーを出してその後も枕木山や宍道湖畔などを巡った。

昌彦さんは、昭和の初め、この地を訪れたカルシュが何を感じ、自身の学問をどう発展させたかに興味が尽きないという。

「近代にまだ毒されていない純朴さを目の当たりにし、皆が幸せに生きるための意味と知恵作りを熟成させたのではないか、とひそかに見ているんですがね」



河畔から大橋川を望む（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授の提供）

大橋川沿いの森に多賀神社の鳥居が見える

新聞　（第三種郵便物認可）

島根の記憶

松江の鼓（どう）

その1

祝い歌 地域にきずな

〜うれし、めでたの若松さまよ
枝も栄える　葉も茂る……

カセットデッキから、高音の伸びやかな朗々とした歌声が響いてきた。山形の民謡「花笠音頭」とは節と歌詞が異なる。所々で「そーれ」とかけ声が入り、「チョウサヤ、チョウサヤ」とのおはやしで締めくくる。松江市北堀町三区鼓宮保存会が、毎年十一月三日に参加する松江の鼓行列で、出発時と最後に披露する祝い歌だ。

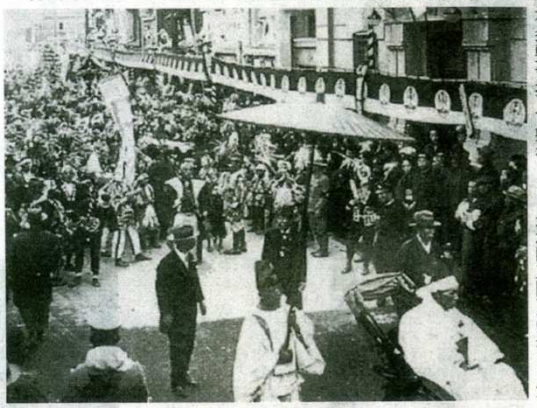
声の主は藤井孝義さん(69)。四十年前に分家して同市春日町へ移るまで北堀に住み、幼いころから父が歌うのを聞いて覚えた。兄の石工、賢さん(83)は声が低く、歌うのは専ら、父の声音を受け継いだ自分だった。

元々は、左義長行事で太鼓をたたいて慰める歳徳神（としとくじん）の宮を担いで練り歩く「宮練り（行列）」の際に歌われた。鼓のルーツがここにあるため、現代の鼓行列に名残をとどめるが、宮練りは、皇室の慶事や市制施行記念など限られた場合にしか行われない。

「このままでは歌い方を忘れてしまう。皆で覚え、後世に伝えよう」と思い立ったのが、同保存会幹事長で市鼓行列保存会副会長の石原幸雄さん(54)らだった。一九九九年春、孝義さんの歌を録音したカセットテープを地区の約五十人に渡し、聞いてもらった。鼓行列ではそれまで孝義さん一人が歌っていたが、市制百十周年記念の宮練りも出たその年秋から全員が歌えるようになった。

今年も行列後の歌が終わると、北堀町三区では男たちが太鼓を庫（くら）にしまい、女たちは直会（なおらい）の準備を整え、世代を超えてねぎらい合った。石原さんは、「代々引き継いできた祭りを通じて、地域に連帯感が生まれる。この、かけがえのなさを守りたい」と話している。

1928年（昭和3年）、昭和天皇御大典を祝い、鼓と宮の行列が出た＝若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供



11月3日に行われた今年の鼓行列の一場面

（第三種郵便物認可）　2004年（平成16年）12月9日（木曜日）　読売　島

島根の記憶

⑮

松江の蓼

その2

「超気持ちいい」伝承

〈蓼だらず〉――。こんな名の愛好会が松江市にある。だらずとは出雲弁で「のぼせ者」というような意味。つまり、蓼が好きでたまらない人たちの集まりだ。

同市末次町でギフト店を営む長谷川憲一さん(56)もメンバーの一人。好きが高じて、太鼓、チャンガラと呼ぶ「銅びょうし」とともに蓼行列に欠かせない横笛を作ってしまった。

同町の蓼をたたいてきたが、四十歳の時、吹き手が数人に減った横笛を覚えようと市内の春日神社の宮司に習い始めた。一か月はまともに音が出なかった。「人が吹けるのだから出来る」。息を出す量や角度を試行錯誤しながら吹けるようになると、初心者用の細い笛が物足りなくなった。

祭りでは、雅楽で使い、指でふさぐ穴が七つある「龍笛」が吹かれることもあった。京都の職人が作るものなどが伝わるが、地元では、かつて吹き手だった祖父大次郎さんが手作りしていた。長谷川さんは幼いころからそれを見て育ち、手先の器用さを受け継いでいた。数年後、市内の竹林から竹を採ってきて、見よう見まねで作り始めた。

長さ約四十センチ、内径約一・五センチ。本体用の竹や給湯パイプ、それに巻き付ける経木や籐、バランスを取るためのおもりなどを調達し、ひと月―数か月かけて一本仕上げる。ホームページで情報を発信し、評判を聞いた市内外の愛好家や指導を続ける小学校のクラブなどで使われるようになった。

「肝心なのは丁寧に作ること。吹くのも、作るのも奥の深さが横笛の最大の魅力です」と長谷川さん。

蓼だらずはメンバー約三十人が町内の枠にとらわれず集まり、基本を守った上で技のレベルを上げ、全国に〈松江の蓼〉をPRするのが狙いだ。二〇〇一年に愛好会を立ち上げ、チャンガラも得意な平野一朗さん(53)が力を込める。

「蓼を思い切り殴り、大きな音を腹に響かせると、超気持ちいい。それをみんなに知ってほしいし、次代に引き継いでいきたい」

（終わり）

自分で手作りした横笛を吹く長谷川さん

1928年（昭和3年）、昭和天皇御大典を祝って出た行列＝若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授の提供